

財団法人結核予防会創立60周年記念 第50回結核予防全国大会



天皇陛下おひしげ

平成十一年三月二十四日(水) ホテルニューオータニ

財団法人結核予防会創立六十周年記念第五十回結核予防全国大会

第五十回結核予防全国大会に当たり、日ごろ結核予防事業に尽くしている関係者と一堂に会することを誠に喜ばしく思います。

六十年前、我が国の著しい結核の蔓延を阻止することを目指して結核予防会が設立されました。当時は戦時下であり、国民の栄養状態も悪化し、特效薬もない状況の中で、結核を患う人々の苦しみと医療に当たる人々の苦労は筆舌に尽くし難いものがあつたと察せられます。戦後、ストレプトマイシンを始めとする新薬の開発やレントゲン検査の普及により、結核対策が強力に推進され、結核をめぐる状況は急速に改善されました。六十年の歳月を通じて関係者が払ってきたたゆまぬ努力に対し、深く敬意を表したいと思います。

今日、結核の予防、治療への対策は非常に進んできていますが、世界各地には今もこの病気に悩んでいる多くの人々があり、国境を越えた協力が強く求められています。また我が国においても近年、社会の高齢化、結核菌の耐性化など、結核の予防や治療に困難な状況が現れてきており、関係者の更なる努力が必要であると思われれます。一八八二年コッホ博士により結核菌発見の報告が行われた三月二十四日が「世界結核デー」とされ、本日ここに、結核予防全国大会が開催されたことは、結核の問題を世界的な視野において考える上で、誠に意義深いことであります。

この大会を契機として、結核予防に対する人々の関心が更に高まることを期待するとともに、皆さんが、国内の各地であるいは国際協力を通じて、結核の予防と治療のため、今後とも力を尽くしていかれることを切に希望して式典に寄せる言葉といたします。

第50回結核予防全国大会を終えて

結核予防会会長 島尾忠男

ユニークな全国大会

3月23、24両日に東京で開催された今年の結核予防全国大会は、ユニークな大会であった。第一には、予防会の創立から数えると六十周年、大会としては五十回という重要な節目に当たること。第二には、その節目としての重要性についてご理解を賜り、天皇、皇后両陛下の行幸啓を仰ぐことができ、総裁秋篠宮妃殿下のご臨席もあり、天皇陛下からは優渥なお言葉を賜ったこと。第三には、従来の大会の開催時期であった5月下旬に変えて、

1997年の世界保健総会で正式に世界結核デーに指定された3月24日に挙行了したこと。第四には、21世紀を間近にして、新しい世紀での結核予防会の事業のあり方についての検討が加えられてきたが、その最終討議が支部長会議で行われ、承認されたこと。第五には、昨年制定された秩父宮妃記念結核予防功労賞の4部門の賞の表彰が、初めて同じ式場で行われたこと。第六には、分科会に代わる行事

としてシンポジウムは時々行われていたが、今回は「21世紀に向けて結核対策の転換を」と題する記念シンポジウムを行い、多彩なシンポジストによる実りの多い発表があったことなどを、今回の大会の特色として挙げることでできよう。

天皇陛下のお言葉

筆者は昨年夏に幕張で開催された国際寄生虫病学会の開会式に両陛下が行幸啓された際、天皇陛下のお言葉を拝聴した経験から、今回の結核予防全国大会に賜るお言葉も内容の濃いものになるであろうと予想していた。お言葉は結核の現状と対策の問題点を指摘し、本会が今後取り組むべき課題と姿勢を示された内容であった。これは大会を前にして3月15日に理事長と専務理事を召され、大会の準備状況について御下問があった中で、理事長からご進講申し上げた最近の結核の状況と対策

の今後の課題について、よくご理解された上でお言葉と拝察している。

開催の時期

大会の開催時期を、従来の創立記念日前後の5月下旬から、世界結核デーに指定された3月24日前後に移すことについては、都道府県の議会が開催されているところが多いこと、年度末が近いこと、官公庁では人事異動の時期であること、種々の団体の理事会、評議員会などの開催時期であることなどから、参加しにくい人もあるのではないかと懸念が出されていた。しかも今回は、昨年5月に長崎で行われた第49回大会と同じ予算年度内となるので、このことから参加者の減少が憂慮されていたが、式典には千二百名を超える関係者が会場を埋め、この点は杞憂となった。多くの参加者を送ってくださった支部や関係ご当局に感謝したい。

ある程度の参加者が確保できるとすれば、大会を世界結核デー前後に開催する意義は大きい。全世界で展開される結核問題を啓発する一大行事に、日本も加われるからである。ことに今回のように、世界賞と国際協力功労賞が同時に表彰されると、参加者の眼も自然に世界に開かれることになる。今回は時間の関係で被表彰者の略歴の紹介はなかったが、少なくとも世界賞と国際協力功労賞について

は、功績内容の紹介は行うべきであると考え
る。

今回の誤算は、北日本を襲った強風と季節
はずれの豪雪であった。幸いに大会当日には
天候は回復したが、中には文字通り雪をかき
分けて参加された方もあったようで、ご苦労
をかけて申し訳ないことと思っっている。

特別講演

今回の特別講演は、友誼団体である日本対
ガン協会の杉村隆会長（国立がんセンター名
誉総長）に、「がんと感染症」という演題で
お願いした。一見全く関係のないような二つ
の病気の間に、かなり密接な関連があること
が分かってきた最近の研究内容を、分かりや
すく解説していただいた。ウイルス感染が発
がんに影響する典型的な例は、B型およびC
型肝炎罹患後長期間経って発生する肝細胞が
んを始め、子宮頸がんや成人T細胞白血病な
どがあり、細菌感染の関連の疑いが濃いのが
ヘリコバクター・ピロリ菌による胃がんであ
る。寄生虫の感染が原因となるがんとしては
膀胱がん、胆管がんなどがある。

また、天寿がんとという興味深い考え方が紹
介された。子宮頸がんや陰茎がんは、家庭で
風呂に入るようになり、清潔な生活習慣が普
及すると共に罹患年齢が上昇し、天寿を迎え
る頃か、これを過ぎないと発病しないように

なり、大きな問題ではなくなってきた。多重
がんという、同じ人に再発や転移ではなくて、
繰り返し発生するがんがあることも紹介され
た。

結核の領域との関連では、慢性結核性膿胸
からBリンパ腫が発生することがある。また、
かつて結核の外科療法を受けた者では、当時
の売血制度による輸血を受けて、C型肝炎に
罹患し、最近になって肝細胞がんになる人が
少なくない。治療の面では、BCGの膀胱内
注入が膀胱がんの有力な治療法である。免疫
を利用するがんの治療は、一部の特定のがん
に有効であることが知られている。がんも感
染症も早期の発見と治療が重要であり、発が
んと関連のある感染症の治療はがんの予防に
なる。

特別講演は、以前は結核についての権威者
に講演をお願いしており、その後は一般教養
的な講演をお願いする機会が多かった。今回
は我が国の保健問題で最大課題の一つであり、
胸部検診では双方が関連する「がんと感染
症」について講演をいただいた。今後の結
核予防活動は生活習慣病との関連が強くなる
ことが考えられるので、全く一般教養的な課
題よりは、関連する問題について分かりやす
く話していただくことが好ましいと考える。

記念シンポジウム

大会の行事としては、大会式典のほかに、
通常はより行政的な問題を扱う第一分科会、
婦人会員を主な対象とする第二分科会を行い、
結核問題に対する理解の普及に努め、特別な
機会には、シンポジウムなどを合同で行って
きた。今回は、結核対策の転換を考へるべき
重大な時期に当たり、その実施には一般の
方々の協力も必須であることから、合同でシ
ンポジウムを行うこととし、演者には結核予
防婦人団体の代表にも加わっていただいた。

また、読売新聞の「医療ルネッサンス」で結
核問題についての特集をまとめた堀川記者に
も副座長として加わってもらい、専門家だけ
に通用する言葉ではなく、一般の方にも分か
る内容にすることを試みた。

座長の青木理事長は、問題点として新登録
患者数の増加、その背景にある高齢者結核の
増加、患者の偏在化、大都市の結核、若い世
代での微増、院内感染など集団感染の多発を
指摘し、これらの問題に対応するために、対
策をどのように転換したらよいか、各演者に
具体的な提言を求めた。

結核予防会京都府支部佐藤専務理事は、今
後の課題として高齢者結核、特に糖尿病など
合併症を持つ者が多いことを指摘し、糖尿病
を含む生活習慣病の管理の重要性を強調、高

齢者の受診への婦人会の協力を要請した。

全国結核予防婦人団体連絡協議会の塩井副会長は、組織の歴史と活動を紹介した後、今後の活動の重点の一つを、従来のシール運動への協力などに加え、若い女性の団体との連携の強化に置き、共に行動したいと述べた。

東京都衛生局の橋医師は、大都市の一部地域での結核対策の難しさ、特に治療を完了することが容易でないことを述べ、これを解決するための具体的な施策としてのDOT（直接目の前で薬を服薬させる方式）の経験を紹



介し、その中で患者とDOT担当者との間に良い人間関係を作ることの重要性を強調した。国立療養所広島病院第二呼吸器科の重藤医師は、最近看護婦の結核発生が増加したが、その背景に医師の結核への関心の低下による診断の遅れがあつて事態を悪化させていることを指摘し、BCG接種の効果にも限界があることから、本格的な院内感染防止体制の確立の必要性を訴えた。

結核研究所森所長は、結核発生動向調査の指標から、結核の蔓延状況、対策実施の状況に著しい都道府県別、保健所別の格差が見られることを指摘し、問題解決のために、保健所が本来の使命に熱意を持って取り組むだけでなく、都道府県の枠を越えた広域の協力度制と、その核となる専門家のいる拠点の設定を提唱した。

山本名古屋市大名誉教授は、前公衆衛生審議会結核予防部会長として、青木理事長が指摘した問題点に対応するために緊急対策を提言した経緯と内容を紹介し、新しい技術を的確に行うために、診療費の面でもそれなりの処遇が必要であることを指摘した。

厚生省結核感染症課の滝澤課長は、国が今後結核対策を重点施策として位置付け、対策の強化を図る決意を披瀝した。

筆者はまとめとして、対策の手の届きにくい集団として、社会的には高齢者、路上生活

者、小零細企業の従業員など、医学的には多剤耐性患者や糖尿病など合併症を持つ者があり、結核対策担当者間の熱意の差も今後の問題であること。半減運動に代わる新しい結核制圧運動を21世紀には展開する必要があること。その中に一般国民や保健医療関係者の結核に対する関心の低下への対応、古くから言われていることで重要性は変わらない早期発見の徹底や家庭訪問、定期外検診などの確実な実施、新しい施策としてのDOT、広域的な取り組みと対策の拠点の設定、新しい事態に対応するための施策の基礎となるBCG再接種の効果の調査や、老人施設入所時のツ反応検査の実施の必要性などを指摘した。

演者が分かりやすい言葉で説明し、司会のリードも適切に行われたので、高度な内容ではあったが、参加者にもよく理解していたのでないかと考えている。明年以降の大会においても、二つの分科会という方式にこだわることなく、今回のようなやり方を続けるのも一つの方法であると思うが、その際に、司会に結核の専門家以外の人も加え、どういう表現をすれば専門家以外の人でも理解できるかということに対する配慮は必要である。

第五十回結核予防全国大会決議

昭和十四年四月、皇后陛下より結核予防の推進に関するご令旨を賜り、翌月、財団法人結核予防会が設立された。

以来、六十年にわたり、我々は、国の対策に呼応し、結核の調査研究、関係者の研修、国民の啓発、検診・診療活動に総力を挙げてきた。その結果、結核の死亡率は、国民病と称されていた昭和十四年当時に比べると、およそ百分の一にまで低下している。

しかしながら、菌陽性患者数はここ二十年來いっとうに減らない。近年は、高齢者や社会的・経済的・肉体的弱者といったハイリスクグループへの患者の偏在化が目立ち、大都市では極端に罹患率の高い地域が存在するほか若者の罹患の増加も見られ、院内感染や集団感染事例があとを絶たず、多剤耐性患者という新たな問題も生じている。そして、一昨年には、全国の罹患率が四十三年ぶりに増加した。国は、このような事態を受けて、結核の緊急対策を講じるに至っている。

発展途上国においては、結核問題はより一層深刻であり、人材、技術、資材が不足するなか、我が国などの協力を強く求めている。我々は、国内外において結核問題が再興しつつあるという現実を重大に受け止め、今後における活動強化の指針として、今般「二十一世紀の結核予防会」構想を取りまとめたところである。本大会は、あらためてご令旨の御心に思いを致し、次のことを決議し、その実現を期するものである。

- 一、現下の結核問題に即して、二十一世紀に向かっての総合的な結核対策を樹立し、必要な財政措置を講ずること
- 一、結核発病のハイリスクグループや薬剤耐性患者などの対応が難しい患者に対する的確な措置を講ずること

- 一、結核研究を一層推進し、結核予防の普及啓発を強化するとともに、結核の専門知識を持つ地域行政担当者・医療関係者の養成を図ること

- 一、結核対策の推進のための国際協力を強化すること
- 一、地域での結核対策を強化するに当たり、全国に展開する結核予防会及び結核予防婦人会の組織と連携を図り、その機能を活用すること

以上、国及び関係当局に要請する。
右、決議する。

平成十一年三月二十四日

財団法人結核予防会創立六十周年記念第五十回結核予防全国大会

第五十回結核予防全国大会宣言

昭和十四年、皇后陛下より官民協力して結核予防に努力せよとのご令旨を賜って以来六十年、我々はこれに全力で取り組んできたが、今、結核問題が再興しつつあるという現実を重大に受け止め、あらためて御心の原点到立ちかえり、「二十一世紀の結核予防会」構想に沿って、国民を結核から守り、その健康の増進に寄与する活動に邁進するとともに、発展途上国の結核予防のために積極的に協力する。

右宣言する。

平成十一年三月二十四日

財団法人結核予防会創立六十周年記念第五十回結核予防全国大会

財団法人結核予防会創立60周年記念

第50回結核予防全国大会

3月23、24日の両日、第50回結核予防全国大会が開催された。2日間を写真で振り返る。



全国支部長会議：結核問題に加えて今回の重要課題は「21世紀構想」の討議。全支部が承認、本会の命運をかけて、いよいよ実行のスタートを切った。

3月23日

この日は午後から全国支部長会議、全国結核予防婦人団体連絡協議会（全結婦連）総会、及び決議・宣言起草委員会。そして午後6時から、歓迎レセプションが開催された。



全結婦連総会：幕開けは「健康の歌」斉唱から。



全結婦連懇談会：60人が8卓に。全卓をおまわりになった総裁に、代表が地区の婦人会活動の話、シール募金運動の報告を申し上げた。



大会歓迎レセプション：400人の出席者で会場は汗が出るほどの熱気。総裁は文字通り席を暖めるお暇もなく、大会の主賓となる方たちを歓待して下さった。



〔秩父宮妃記念結核予防功労賞第2回表彰〕17名（世界賞1、国際協力功労賞1、保健看護功労賞5、事業功労賞10）の方々が両陛下の御前で表彰されるという榮譽に浴した。



国際協力功労賞の橋本達一郎氏（筑波大名誉教授）は、発
展途上国でBCG工場を作った功績を讃えられた。



保健看護功労賞受賞者5名を代表して白岩さん。



受賞者の記念撮影：（前列右から）明珍、木野、村松、秋田、深澤、（後列右から）橋本達一郎、橋本正、原田、小林、山本健一の各先生（橋本達先生を除いて事業功労者）木野、橋本達両先生は大学でクラスメイト。



世界賞受賞のProfessor Pierre Chauvetは化学療法の権威。先生の受賞を記念する講演会が大会最後を飾る行事となった。座長は結研石川副所長が務めた。



3月24日

午前中は大会式典・議事、記念講演、午後は創立60周年記念シンポジウムが行われた。天皇皇后両陛下の行幸啓を仰ぐのは、平成元年の50周年記念大会式典以来10年ぶりのことである。参加者1260名。



式典全景
中央に立つのは島尾会長



天皇陛下から賜ったお言葉の最後は「結核の予防と治療のため、今後とも力を尽くしていただけることを切に希望」と、我々へのお励ましであった。

受付風景 ほぼ10年に一度の東京大会とあって、本部各事業所や東京都支部から多くの職員が助っ人として馳せ参じてくれた。



青木理事長の案内で総裁秋篠宮妃殿下のご入場。



3月24日

式典・議事に続いて国立がんセンター杉村名誉総長の記念講演、昼食後は、21世紀におけるわが国の結核状況をにらんでの記念シンポジウムが開かれた。



杉村氏の記念講演：ヘリコバクター・ピロリと胃がんの話に思わず腹を撫でる人あり、再発や転移でなく繰返し発生する多重がんの話に、おれの事かと首をかしげる人あり、お話の終わった時は会場にはホーッと溜息が。



記念シンポジウム会場：聴衆およそ800人。



座長群と助言者：右から本会青木理事長、読売新聞社編集局医療情報室堀川記者、公衆衛生審議会結核予防部会山本前部会長、厚生省滝澤結核感染症課長。専門家同士の固い話にならないようにと副座長にお願いした堀川さん、記者の感覚で座を盛り上げてくれた。



シンポジストの方々：右から京都府支部佐藤専務理事、全結婦連塩井副会長、東京都橘技官、国療広島病院重藤医長、結研森所長。決められた持時間内での充実した意見発表はさすがだった。



大会参加者に配布された記念品：本会の歴史を簡略に記した「六十年の軌跡」（B5判、63頁）と記念テレフォンカードなど。袋の図柄は昨年の結核予防週間ポスターから。

本大会が「世界結核デー」に合わせて開催されたこともあって、世界の結核の現状を図示したパネルや世界の複十字シールが会場前に展示された。

